

第4回文化芸術によるまちづくり座談会 議事要旨

日時	2014年1月19日(月) 午後1時～3時
場所	町田市役所2階 市民協働おうえんルーム
出席者	座長 市川宏雄氏(町田市未来づくり研究所所長、明治大学教授) 委員 伊藤せい子氏(江戸川区総合文化センター館長、サントリー・パブリシティ・サービス株式会社) 委員 西茂弘氏(株式会社オン・ザ・ライン代表取締役社長)
	町田市長 石阪丈一
	町田市副市長 高橋豊
	町田市副市長 有金浩一

資料 第4回文化芸術によるまちづくり座談会(スライド)

議事

1. 議題:町田市における文化芸術資源

事務局が、資料を用いて、町田市への集客という観点から周辺エリアの特徴を分析し、各エリアにおける優位性や競合関係について報告を行った後、委員による意見交換を行った。

委員:山梨・静岡からの集客を想定するのか、都心からの集客をするのか。町田市民はもちろんだが、市外から集客する際のコアとなる地域を設定する必要がある。集客はコンテンツ次第になるだろう。経営的には、専門ホールでは稼働率が上がりにくいので、多目的ホールが望ましいと思う。

委員:東京都のホールツアーの会場は、東京国際フォーラムと武道館が挙げられるが、国際フォーラムは予約が集中しており、利用しにくい状況にある。コンサートの収益構造は、東京圏での利益を元手にして地方を巡回しているので、興行主としては東京圏に多くの観客が入るホールがほしいと思っている。2,500席のホールが町田市にできれば、人気アーティストのコンサートも巡回するだろう。集客を図ろうとするのであれば、他のホール(特に相模原市)とは差別化を図るべき。

有金副市長:自分がコンサートに行くことを考えても、都内に国際フォーラム並みのホールがあればいいと思う。興行主に選ばれる根拠が席数であるなら大きいホールが望ましいが、市町村の財政で維持できるかが気になる。駅前での土地の確保も問題になるが、都心から集客を図るのであれば検討する必要があるだろう。

高橋副市長:都心や横浜に人が流れるなかで、ホールを町田駅前の核とすることで逆方向の流れをつくれるかもしれない。そのためのホールがよい。質問だが、望ましい駅からの距離と、バックヤードの必要性について教えてもらいたい。

委員:第1回目の座談会で、5分以内であれば稼働率がよいというデータがあったが、どうか。

委員:ホールに来る人は他のホールと比べる。1回足を運んでみて不便さを感じるようなら、

2度目は足が遠のく。他のホールよりも便利になるように考えるのがよいだろう。

バックヤードに関しては、最近のコンサートは演出に凝るので、ハード面が立ち行かないとコンサートができない。建設の際には専門家に話を聞いて、検証するのがよいだろう。

石阪市長：土地の確保とのトレードオフの議論だろう。町田駅前には土地にゆとりがないので、大きなホールは方針として取りにくい。逆に席数を確保しようとするれば、都市再開発の話に及ぶかもしれない。

委員：委員の意見は、駅前に 2,500 席のホールを持つ多目的ホールという意見でまとまりつつあるようだ。そのためには観客のコアターゲットを考えなければならない。また、規模の大きなホールは建設・運営・維持にお金がかかるので、見返りを想定した投資としての考え方が必要だろう。

2. 議題：新しい文化芸術ホールの考え方～創造・集合・発信～

事務局が、資料を用いて町田市に対する SWOT 分析の結果を発表し、とるべきホールの経営戦略として、観客動員、芸術創造・発信、市民活動支援の3つを紹介した後、委員による意見交換を行った。

委員：観客動員は達成するべき前提だろう。そこから、さらに文化芸術や市民育成にどこまで打って出るかという議論ではないか。

委員：いまある市民活動がなくなるわけではないが、仮に 2,500 席だとすると市民団体には使い勝手がよくないので、既存のホールの有効活用を考えられる。町田市のなかで何ができるのかを考えるべき。2,500 席なら観客動員には有効だが、芸術創造・発信や市民活動支援は難しい。だが、エンタテインメントも文化にならないわけではない。ホールに感動をもとめて人が集まることも文化ではないか。

委員：不動産業界の観点では、稼働率が 90%を超えると、ビル経営よりもアリーナの方が採算性が高いと見られる。民間資本による建設も考えられるのではないか。可能性は広くとらえるべきであり、土地の制約からホールの規模を決めてはいけぬ。また、周辺のマーケットも十分に意識しないとイケない。

委員：PFI という手法もある。東京のマーケットを考えると、多摩エリアでの競合はあるが、うまく出し抜けるかもしれない。ただ、市の産業活動も喚起できないと、コストは回収できないだろう。

石阪市長：協力して事業を行っている団体の活動に対して、2,500 席のホールは規模が大きすぎる。2,500 席を前提とすると、そのような団体の活動の場を別に持つことになるが、負担することが難しい。

委員：複数のホールを持つことが考えられる。また、新しいホールと既存の市民ホールは別の目的を持っているので、それぞれの目的を明確にして、棲み分けを考えてもよい。

石阪市長：ホール経営と都市経営をまとめて考えないとイケない。建設費・運営費ともにとれだけの財政負担をするのか。都市活性化による利益をどう見込むのか（見込むこと

ができるのかも含めて)考える必要がある。

委員:町田市として文化芸術に対する政策意図を強く持っているのか。市の方向性のなかでホールの存在理由をどう考えるのか。そういった理念がないと、持続性は持てないのではないか。

委員:コンサートで地方を回ると、ホールと地元の関係が構築できてないことが多いことに気づく。コンサートの日、タクシーや飲食店が対応していないことがある。経済的な見返りをもとめるなら、町田でお金を落としてもらおうための仕組みと戦略を立てないといけない。一方、市民分化支援を行うのであれば、市としてのコンセプトをもって展開をつけていく必要がある。両立は難しいので、いずれかを選ばなければならない。

委員:ふたつの論点があった。ひとつは、ホールがまちにとってどのような効果があるのかという話で、もうひとつは既存のホールと新しいホールの棲み分けについてだった。自分としては、まちを変える分起点となるホールを考えてもらいたい、市としてホールに何をもちとめるのかを整理しないといけない。

委員:2,000席を越えるなら、ホール単体で考えるだけでは十分ではなく、周辺環境もふくめて検討する必要がある。一方、1,000席弱であれば、ホール単体で考えられるが、経済効果も見込めない。

高橋副市長:ホールをつくることで市民サービスをする際、市民は、ホールを利用する活動主体という立場よりも、観客という立場が圧倒的に多い。その層の市民の幸福度を向上するための方策を考える必要もあると感じた。

有金副市長:既存ホールの活動を精査して、現状に対して何が必要なのかを考える必要がある。一方、観客動員を図ろうとするのであれば、地元事業者に協力いただく必要があるだろう。

石阪副市長:ホールとまちの関係構築には時間がかかることだと思うが、まち全体でホールを盛り上げていく気運をつくることが重要だと感じた。

以上